

学会活動報告

実践活動報告 / 症例報告ショートレポート執筆支援活動について ～第1回ワークショップの報告を中心に～

近藤 衣美^{*1,*2}、石原 健吾^{*3}

^{*1} 日本学術振興会特別研究員 (PD)、^{*2} 筑波大学体育系、^{*3} 龍谷大学農学部

栄養サポートの質を高める方法の一つに、「実践活動報告」や「症例報告」の執筆があります。執筆を通じてサポート内容の客観的な振り返りができる上に、執筆した原稿を日本スポーツ栄養研究誌に投稿することで、その分野に精通した専門家から改善のためのアドバイスを受けることができます。とは言え、栄養サポートを行いながら論文執筆のためにまとまった時間を作ることは困難です。

このたび日本スポーツ栄養学会では、より多くの方に「実践活動報告」や「症例報告」を執筆・投稿するメリットを享受していただくために、ショートレポート（刷り上がり2ページ以内の原稿）部門を新設しました。さらに、執筆経験が少ない方のために、オンラインでワークショップを開催して、下書き原稿（栄養サポートの様子がわかるもの）を完成原稿にするためのサポートを始めました。

第1回ワークショップ（2022.3.13開催）では、参加者、講師の自己紹介の後、論文執筆における全般的な注意事項について、20分ほど講義を行いました。その後、1対1の個別添削指導が50分ほど行われました。添削指導の内容は、あらかじめ3名の講師が受講者の原稿に目を通して準備したものです。つまり各受講生は3名の講師からのアドバイスを受けられることになります。

後半の約60分間は、日本スポーツ栄養学会の会長、副会長と講師3名、全参加者の交流の場を設けました。ワークショップ参加の動機として、「学会が1月に開催した『会員の広場』で、自身の日頃の活動にもショートレポートとして執筆できるテーマを多く抱えていることに気づけたことが、きっかけとなった」「以前から現場の活動をきちんとまとめる重要性は理解していたが、自身の活動報告が他の会員やスポーツ栄養士の参考になるものとは考えてもいなかった。しかし、本ワークショップは1対1の指導を受けられる

チャンスであると考え、思い切って参加した」「すでにショートレポート執筆に取り組んでいたが、実際に論文を執筆していく中でうまくまとめることができずに悩んでいた」などが挙げられました。

ショートレポートは分量が短いので、書いてみると規定の文字数を超えてしまう方が多くいらっしゃいます。簡潔にまとめるためには、自らの栄養サポートを客観的に振り返り、「活動の中で見つけた特徴的な事例・症例」や「新たにチャレンジした特徴的な活動とその成果」を強く意識して焦点を絞って執筆することが重要です。そのため、ワークショップでは、栄養サポートの特徴を整理して、今後のサポート活動の改善につながるような添削指導を心がけています。

ワークショップを経て参加者が改訂した原稿は、日を改めてもう一度、講師が目を通してメールでの添削指導を行い、原稿の完成をサポートします。

参加者からは、「文章の構成からデータのまとめ方まで細部に渡りアドバイスをもらえたことは、期待以上のサポートであった」「論文執筆を通じてデータを整理し発表することで、サポート活動の課題を見つけるきっかけにもなり、チームや選手へのサポートの充実にもつながる」などの感想が寄せられるワークショップになりました。

今回発刊した日本スポーツ栄養研究誌第15号サプリメントには、ワークショップでの添削指導を経て、投稿・採択されたショートレポートが複数掲載されています。競技現場の特徴的な事例、症例と思われるデータをお持ちの方は、ショートレポート執筆を通じて客観的な振り返りと専門家から改善のためのアドバイスを受けてみませんか？「ショートレポート執筆ワークショップ」は、定期的に行っていますので、思い切って参加して、栄養サポートの質向上のための新たな交流の場として活用してみてください。